



◆特殊な時刻制度に対応した江戸時代の和時計

『機巧図彙』は首巻と上下巻からなる三冊の本です。首巻には和時計の作り方が三種類、上下巻にはからくり人形の作り方が九種類掲載されています。和時計と呼んで区別するのは、それが日本で作られた機械時計であり、当時の日本の時法に合わせたつくりになっているからです。

この頃の日本はまだ子の刻、丑の刻、あるいは明け六つ、暮れ六つ等と言っていた時代でした。図版の柱時計の文字盤にも、十二支が書かれています。一刻の長さは昼と夜で異なり、また季節ごとでも変わります。

時計の図の左側にある文中に「鍾にて日々昼夜の長短の加減をするなり」とあるように、この時計は鍾を用いて日々の一刻の長さを調整していたのです。

もう一枚の図版にある茶運人形は、その名の通り茶碗を運ぶ人形です。右上には、茶運人形の説明が書かれています。

「人形の持て居る茶臺のうゑにちやわんを置けば人形向ふへ行く」人形の持つ茶台の上に茶碗を置くと、人形は進みます。「茶碗を取れば行き止る」茶碗を取ると、その場に止まります。「また茶わんをおけばあとへ見かへりて元の所へもどる也」飲み終えた茶碗を再

び茶台に置くと、人形は後ろを向き、元の場所へ戻ります。昨今の飲食店には配膳ロボットがありますが、茶運人形は江戸時代の配膳ロボットと言えるでしょう。

著者はからくり半蔵とも呼ばれる土佐（高知）出身の細川半蔵頼直。天文学、暦学、数学を学び、寛政七年（一七九五）幕府の改暦事業に携わりましたが、残念ながら完成前の翌寛政八年に亡くなりました。

時計やからくりの仕組みを図解した本は大変珍しく、江戸・大坂・京都の三都で出版されており、当時の人氣が窺えます。

（天理図書館 池谷 礼）

＜天理図書館のお知らせ＞

Tel 0743-63-9200 URL <https://www.tcl.gr.jp/>

◇平日（午前9時～午後5時半） 土・日・祝（午前9時～午後4時半）

○12月の休館日：4日・11日・18日・23日・25日／年末年始12月27日～1月6日

（本欄にて紹介した名品の閲覧については係へお尋ねください）

\*最新の情報については公式HP、Twitterでご確認ください。

▶【からくりずい・きこうずい】

細川頼直著

3冊

寛政8（1796）年刊

縦22.8cm 横16.1cm



DATA